

---

# ゼロからの転校生

因幡素兔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼロからの転校生

### 【Nコード】

N6123I

### 【作者名】

因幡素兎

### 【あらすじ】

クラスでいじめを受けている。

和成は自殺を決意し、その日、学校の屋上に立った。

しかし、そこで転校生と出会った。

空を飛ぶように晴れやかな貌をして、つぶれたヒキガエルみたいに無残に死んでしまっただ

Heaven

(D)

見下ろすと風景は爽やかなほど広大なパノラマだった。丘陵の上に建てられた校舎の屋上から眺める映像はまるで高い展望台から見渡しているように爽快だ。遠い物は小さく、近い物は大きく、当たり前の世界が当たり前前の風景。バイパスとその奥の高層ビル群は小さく、手前のコンビニや焼き肉屋なんかのほうはまだ大きく見える。見慣れた景観でもない。こんな位置からこの街を見たのは初めてだった。4階や3階のトイレの窓から見るときより、よっぽど臨場感があるのは、今僕が立っている場所が視界と何の隔たりもないからだろう。

「バカみたいだな・・・。」瞬間、言葉が先に出た。本当バカみたいだと。

こんな終わる寸前になっても、人間つてのは初めてを感じるものなんだな・・・。

木枯らしが吹きすさぶ、肌寒さはご愛嬌。秋が過ぎ冬がやって来る季節の屋上はこのぐらい寒いのが当たり前なんだろう。高い場所というのは風が強いから・・・制服の襟元をたぐるように風が寒さを滑らせるんだ。それでも僕は今、そんな寒さなど気にならない。

何故なら今日はとっても清々しい。本当に、半年振りくらいに・・・気分がいい。

朝、家をでる時母がいつも通り心配そうに「大丈夫？」と声をかけてくれた。僕はその言葉に笑顔で「大丈夫」と返せた。嘘じゃない

い。本当にもう僕は大丈夫だ。本当にもう、僕に心配はいらないんだ。学校に着いていつもどおり机を洗って、汚れてしまった制服も拭いて。独り窓際に腰掛けクラス中の会話に耳を傾けるぶん、今日の僕は気分もより余裕がある。クラスメートの松本隆がその友人の高橋徹と市販のコンバットナイフをネタに会話を弾ましていたことや、隣のクラスに転校生が来たこと、担任の教師がもうすぐ結婚するらしいこと。様々な会話に耳を傾け、まるでお地藏さんの様に敢然としていられたのは僕がもうすぐそういう者になるからだろうか？

いつもどおり授業を受けていつもどおりの放課後。そうして立ち入り禁止の屋上へ忍び込んだ僕は、終にソレを実行しようと今ここに立っている。

広い横長の屋上の端、僕の育った街の見わたせる場所、金網のフェンスを登り越えた先は、もう、まるで宙に浮いているような絶景。フェンスと絶景の間は、僕独りが二本の足で立つのにぎりぎりの狭い崖。そうして、ふと上を見上げると、僕の心を映したように雲一つ無い晴れやかな青空が広がっていた。

どこまで続いているのかわからない。空は永遠を思わせるほど浸透して青い。吸い込まれてしまいかねない、神秘的な色だ。

深呼吸をしてみる。別に脈拍を落ち着かせるためとかではなく、ただ、ここの空気を心置きなく吸っておこうと思ったからだ。それにこんなに天気の良い日には発作みたいに深呼吸がしたくなるものだ。人間ってそういうものなんだ。それはもうすぐ終わる者でもまだ先の長い者でも一緒、生きていることに変わりはないんだ。

冷たく青い空気を肺に入れて暖めて返す。長い間連れ添ったその感触もこれで吸い収めだ。そう思うと何だか懐かしい笑顔が頬を緩める。

振り返り背中の中の後ろのフェンスの向こうに置いて来たカバンと置手紙を確かめる、そういえば上履きも脱いでおいたほうが良かったんだろうか？などと考えても意味が無い。どうせ体裁なんて整える

必要はじき無くなるんだから。そう、もうじき。

昔、自殺者を目撃したことがある。

今まではちよつとした自慢話程度のネタの一つだった。

その人は会社員風の中年の男の人だった。今思えば僕はその人のことを何一つ知らないどころか、顔もよく覚えていない。でも、それでもハッキリ覚えているのは、その時、その男の人はとつても幸せそうだったことだ。そして分かったことは、人は高いところから落ちて死ぬ時、空を飛ぶように晴れやかな貌をしてつぶれたヒキガエルみたいに無残に死んでしまうんだ、ということ。

男の人は地面に激突すると、何の装飾もない平坦な音を立てて着地した。

グシャつて、まるで誤って大きなトマトか何かを落としてしまったみたいだ。男の人は、血を流して潰れていたんだ。でもトマトと言うよりそれは、まるで道ばたで交通に巻き込まれひき殺されたヒキガエルを連想させられた。忙しい人間の雑踏にヒキガエルの貧弱な存在が踏みつぶされて死んでしまった様に僕には思えた。

自殺だったらしい。後で知ったことだけど、その時もたぶん自殺だとは思っていたのであまり驚きはしなかった気がする。普通人はビルの屋上から足を滑らして事故死するようなことはめつたに無いだろうから……。だからきつと、その男の人は自分から足を投げ出して……。だから、笑顔を浮かべて死んでいったんだ。望んでそうなったのだから、それはその男の人にとって一つの終幕しあわせだったんだ。

屋上から真下を見下ろすとちょうどそんな古い記憶を思い出した。思えば、僕はその行為を長い間自分とは無関係なものだと思っていた。自分から死ぬなんて……。ありえない。そう思っていた。理解できないことは理解できないと、僕は断じて不思議なその行動を、その原理を知ろうともしなかった。いや、知れなかった。

でも今は違う。絶景せかいだと思ってた風景げんそうも首を傾け真下げんじつを見下ろす

と意外に分かりやすいものだとなつた。見下ろす俯瞰の風景は否  
応無しにその正体リアルを突きつける。

### 地面が遠い

ただそれだけの映像げんじつが、何を連想させるのか？そんなものは考  
えるまでも無く、ソコに残った映像イメージは 潰れた人間の現世から  
身だだ。

未練がない、と言つたらウソになる。未練はある、僕だつてまだ  
若い。それでも今選択できる僕の生きるための行動はこれだけなん  
だ。だから少しでも思いを晴らすために遺書も書いた。その遺書が  
じきに開かれ、中身を見て奴等がどれだけ裁きを受け、どの様な  
貌をするのか、ソレが見れないのが少し残念だけど、僕はこれでい  
い。もう二度と明日を信じて生きていくことなんて出来る気がしな  
いんだから、これでいいんだ。

それにしても不思議だ。ここに来て足の震えが止まらない。でも、  
このままここにいても僕は救われぬ。こんな生活げんじつをこれ以上生き  
て行くより、このあまりにも直結した風景げんそつに飛び込んだほうが幾分  
も楽だ。幸せだ。

きつと、前にビルから飛び降りた男の人も同じことを思つたんだ。  
思い出せばすばらしい笑顔だつた。まるで極楽を知つた人間の貌だ  
つた。以前までは、どうなつたらあの状況であの貌が出せるのか不  
思議で知ろつともしなかつたけど、今なら分かる。きつとあの男の  
人はその瞬間、全ての事から救われたんだ。死が、その行為が、彼  
を成仏かんせいさせたんだ。

蒼い風が頬をよぎる。下界そしは校舎裏手の駐車場。このまま落ちる  
と、真つ逆さまに激突するだろう。黒い、黒い湿ったコンクリート。  
昨日降つた雨の色が残っている。ソコはこれから僕が落ちてても、こ  
んな風に色を残してくれるだろうか？僕の体から流れ落ちるであろ  
う、真つ赤な血の色をソコはしっかり記憶してくれるだろうか？

吸い寄せられる。さあ、そろそろ時間だ。飛ばう。

遠くへ……。

その小さい風景げんじつの先へ。

何も辛いことなど感じることはない、幸せの場所へ……今から僕は、

天国へ旅立つ。

「死んだら何処へ行くのか知ってる？」

死んだら何処へ行くのか知ってる？死んだら？死んだら……。

「天国。」振り返り答えると黒髪が嗤った。

端正なマスクは甘い笑みを浮かべている。パールの様に白純んだ肌だ。

最初からソコにいたんだろうか？少年は屋上の大きな給水ポンプの上に座っている。

「じゃあ、死んだら何になるのかも？」

ウェイブの黒髪を木枯らしに揺らしながら少年は再び質問する。

給水ポンプの上、無造作に座り込みながら……死んだら何になるのかって、嗤いながら質問する。

死んだら何になる？仏……じゃないよね。僕は仏教徒じゃないもんね。じゃあ、死んだら何になるんだ？……土に帰る、とか？

「ゼロになる。」少年が答えた、自分で。

僕が返答につまっていると、少年はニイと嗤いそんな数字を口にした。そんな少年は白い顔をしているのに、まるで黒猫の様に無軌道で邪悪な者を連想させられた。

「……止めても無駄だよ。」

一応、たぶん、少年は僕を止める気は無いように思ったけど……それでも今の僕にとって一番予想される他人の行動はソレだったから。僕はくだらない問答を終わらせるように言い放った。

すると少年はまた嗤う。黒猫のように大きく丸い三白眼を歪めて、ケタケタと。まるで神様が人間を揶揄するように……バカにしてる。

少し、腹が立った。だから、僕はムスツと貌をしかめる。実に何ヶ月ぶりかにもともな表情の使い方をした気がする。

「わるい、わるい、違う違う。アハ、止めるなんてそんなつもり毛頭無かったからさ。」

少年は嗤いをこらえながらも、謝罪して、そのまま立ち上がってピョンと軽々給水ポンプから飛び降りた。開かれた制服のブレザーがコウモリの羽みたいに両脇に広がって着地と同時にまた閉じた。一連の動作を木の葉が落ちるように滑らかにこなすと、ソコで続けて言う。

「ただ、良い昼寝場所を見つけて、味見がてらうたた寝してたら、突然アンタが入ってきて見てたらおもしろいことしてるなあと思ってね。」

おもしろい？この際10月のこの寒さの中、屋上で昼寝する奇特さはおいといたとしてもおもしろいってのは、おかしい。少年はどうやら見かけ通りかそれ以上に変な人だ。だって、自殺者を見つけて楽しむなんて・・・いや、  
案外、普通なのかも知れない。

たにんごと  
無関係だと思えば人は意外に冷たい者だ・・・そんなこと、僕が一番知っていることじゃないか・・・。人はいつだって独りだ。そう気づけたから僕はここにいるんじゃないか。今更誰かに思いやりなんて綺麗な理想を求めても無意味なことなんだ。

一瞬彼の言葉の無神経さに腹が立ったが、よく考えるとなるほど別に普通だ。変なことなんて無い。自殺者を見つけたら普通人は、おもしろいことをしていると思うんだ。

「おい、ちよつとでいいからコツチ来てみ。」  
少年はいつの間にか足を曲げてしゃがみ込みグリーンのコーティングの施された屋上の地面にチヨークの様なもので何か書くようにしているようだった。

黒い黒髪を黒猫の様にざわめかせ。白い美肌を赤い唇で彩り。紺のブレザーをマントのように垂らし、少年はまたニヤリとこつちを見て嗤った。

今日の僕は少し違う。何故なら今日はとっても清々しい。本当に、

半年振りくらいに・・・気分がいい。朝、家をでる時母がいつも通り心配そうに「大丈夫？」と声をかけてくれた。僕はその言葉に笑顔で「大丈夫」と返せた。学校に着いていつもどおり机を洗って、汚れてしまった制服も拭いて。独り窓際に腰掛けクラス中の会話に耳を傾けるぶん、今日の僕は気分もより余裕がある。

だからか、僕はその時引き寄せられるように、後ろの絶景から離れて、フェンスを登って彼の元へ誘われた。

木枯らしの吹く季節、かじかむほどには寒くなく、それでも肌を震えさせる程度には寒い、そんな季節の学校の屋上。僕は彼と出会った。思えばこの時、彼と出会っていなければ僕は、不可知などという幻想げんじつと、出会うことなど無かっただろう。

\*

「俺は赤司夜点あかしやはじめ、点って書いてハジメって読ませる。」

「僕は縁上和成えんじょうがすなり。」

無意味な自己紹介をした。

ハジメという黒猫みたいな少年はどうやら今日、僕の通うここ金城高校に入学してきた噂には聞いていた転校生だそうだ。転校初日から放課後の屋上で寝心地を見ると称して晩秋の寒さの中寝るような変人で、その上、目の前で自殺する人間に止めるでもなく平然と話しかけてくる、やはり変な人だ。

ハジメは言った。「アンタ知ってるか？この世にはルールがある。その中で死んで言うのはどういうルールなのかってことをさ？」

グリーンのコーティングの屋上の地面、僕とハジメは隣り合っ  
しゃがんでいる。

「さあ、ルールって言われても・・・死はルールでは無いんじゃない？特に自殺なんて本当はいけないことだろう？」

「アハハ、それ社会のルールね。違う違う、俺が言ってるのはこの世のルールさ。」ハジメは綺麗な顔で子供みたいに無邪気に嗤う。

この世のルールと社会のルール？僕にはよく分からない違いだ・・。

「いいか？カズ。社会のルールは破れるけど、この世のルールは俺たちでは破れないんだぜ。」

僕はその言葉の意味が分からず貌をしかめる。するとハジメはニイと嗤って続けた。

「つまり社会は俺たち人間が外枠の枠組みなんだよ。だからその外枠である俺たちは枠組みの外と接触しているから、破るってゆーか出来るが出来るわけ。」

でも、この世っていうのは俺たち人間以外の多くの存在を内包した最大の枠組みなんだよ。その枠組みでは俺たちは外と接触していないから少なくとも俺たちとして外に出ることはできない。ちょうど宇宙と同じさ、俺たちの社会が一つの星系だとしてこの世っていう星系を含む銀河をさらに包み込んだ大宇宙と同じなんだ。実際に膨張を促す外殻以外は外とは接触できないだろ？」

ハジメは”わかるか？”と横目で僕を覗く。僕にはその言葉の意味が未だよく理解できていなかった。

ハジメはそんな僕をキツシツシと悪戯っ子のように無邪気に嘲り、地面のグリーンに白いチョークで何かを書き始めた。

$a + b = c$  反対にすると  $c = a + b$ 。数式だ。しかも中学生レベルの基礎の基礎。aとbの合計値がcになるため、cをaとbの二つから構成できることが分かる、そう言う方程式だった。そしてその下に別の計算式をハジメは無言で書き続ける。

$a \times b = c$  逆にすると  $a \times b = c$ 。上と同じく初歩的なかけ算の方程式だった。aとbをかけるとcになる。つまりcはaとbのどちらかで割ることによりaで割ればbが求まり、bで割ればaが求まるといったことが分かる。

「かけ算と足し算の違いって分かるか？」

ハジメは二つの方程式を書き終わるとそう、訊いてきた。

「かけ算は倍で足し算は合わせるの違いだろ？」

僕は当然の答えを返した。当たり前だそんなこと小学生でも知っている。

それなのに・・・ハジメはケタケタ嗤う。

「なに？間違ってるかな？」

僕はムツとなって彼に詰め寄る。するとハジメは”いや、あつても具体的にじゃない”と言ってニヤつと横貌で嗤った。

「かけ算は現実で足し算は幻想だ。

例えばリンゴ一つとリンゴ一つを合わせるとリンゴ二つになる足し算。あれは正確には有り得ない。映像をもろに脚色して形の数量を規定の規則の中で表現したいときに用いる技術げんそつが足し算さ。ハツキリ言つて同じリンゴは二つ無いしな。

それに対してかけ算は余程可能性が広い。3リンゴと2リンゴをあわすと6リンゴの可能性が生まれる。足し算なら5リンゴがやつとだ。もつとわかりやすい例えを言えばこうだ。

Aさんが手をたたきました、Bさんがソレを聞き取りました。と、この問題の計算式を簡単に表すと、A手をたたく×B聞き取るという式になる。足し算にはならない。何故なら足し算だけでは答えが平面なんだ。立体的じゃないんだよ。

つまりかけ算はパターンを包摂している。この世のルールさ。広がりが増えていくのは加速している、加速しているのは固体が増加し可能性が無限大に増えている証拠だ。

もつと言えばかけ算の反対は割り算だ。割り算はこの世界を創っているんだぜ。知ってるか？

宇宙は元々、一つの質量だった。その質量が何等分にも分かたれて間隔を隔てて距離を広げていく状態を拡大膨張と人間は呼んでるんだ。

かけ算のように増加している状態は実は割り算さ。

そしてこの世を動かしているのは無限大のIF。つまり足し算のように一直線の2Dじゃない。かけ算の様な3Dが正解なんだよ。」

僕は彼の言っている言葉が飛躍しすぎていて少々・・・いや大分、

考え方がズレていて、結局何が言いたいのかわからない。だから果然と耳を傾けているとハジメはクククと無邪気に嗤い黒髪を揺らした。

「分からなくていいんだぜ、カズ。俺たちは感覚でソレを理解しているんだ。脳みそで理論あぐねてる方がよっぽど陳腐さ。」

ただ言いたいことは、俺がこれからする話は、全部かけ算だつてことだけ。足し算は使わないからな。」

「ウソはつかないってこと?」

「ああはあ?ま、そう言うことだな。」

ハジメは空を見上げた。そしてその姿勢のまま、空に向かって僕に訊いた。

「暗黙のルールって何か知ってるか?」

またよく分からない問題だった。僕はとりあえず彼と同じように後ろ手をつき、空を見上げた。

「さあ?なに、暗黙のルールって?」

「この世の絶対の領域さ。ここから先は出られませんっていう値<sup>ルール</sup>。」

「……わからない。」

あまり考えもしないで根を上げた。

空を見上げていると、頭が空っぽになったように……思考が滞る。

青い青い空。何処までも誘うような魅惑的ですこし怪しく、不安でソレでいて希望に満ちた、広い色だ。見上げているだけで包まれている感覚が、妙に懐かしいにおいを感じさせる。

「式と答えの裏に隠されたルールは0。」

呆つと空を見つめる僕を気にもしないで隣でハジメは話を続ける。「ゼロつてのは、この空と同じさ。俺たちの揺りかご。いつだって俺たちの上にある者。」

俺たちが笑ったときも、俺たちが泣いたときも、俺たちが怒ったときも、空はいつだって上にある者、その中で俺たちは生きている

者。」

ビュウッと蒼い風が吹く。ブレザーの隙間から少し体を冷やす。隣の黒髪が揺らめく。

僕は少しわかりやすい話になってきたからか……彼に横目を向けた。

「ゼロってのは欠如って意味さ。」

ハジメは空を見上げたまま話を続けている。

その横顔は空を見つめている。絵に描いたように美しいラインが額から目、鼻筋をクネクネと通り顎でキリツとカーブする。

美貌だなあ、僕は思った。彼は話を続けている。

「ゼロはソコだけ正体の分からない場所。知らない事。式と答えで言えば、もう忘れ去られた過去、それと未だ知らぬ未来。コレがゼロの定義。」

俺たちの記憶の中で正しく形を与えられていない者を総称して、ゼロって値に当てはめる。

要するにゼロってのは俺たちが知らないで乗っている揺りかごの様な者さ。どんな式にもどんな答えにも必ず後ろにゼロって値が隠されている。大元となる器なんだ。」

言っていることは、なんとなく分かる気がしてきた。つまり、ゼロは無という有ってことか……。

確かに僕たちは物の重さを計量するとき、秤に乗せるお皿分の重さを引いて、皿の上の物体の重さだけを取り出す。皿は在るのに、無いんだ。これは皿の値をゼロにあわしている事と同じだ。

「そこで死んだら何になるか？最初の話に戻る。」

ハジメはズイッと首を曲げて僕を正面に捉えた。すごく楽しそうなニヤリ嗤いを浮かべて、長めのウェイクの髪を貌の後ろで揺らめかせまるで闇みたいにざわめいている

「ゼロになる……って確か最初キミは言ったよね。」僕から訊いた。黒い嗤いを浮かべる彼に、その白い端正な顔の少年に。僕から訊いた。

ハジメは満面の笑みを浮かべる。ニカーっってお日様みたいにサンサンとした子供の貌だ。

三白眼は見開かれ、よもすれば四白眼ではないかと思われるほど、驚喜した表情。彼は答える。

「正解。そうさ、ゼロになる。」

黒髪が嗤う。心の底まで見透かされてしまいそうな穿った瞳が僕を見つめる。

「いいかい？カズ。」ハジメはそう言って訊かれなくても説明を始めた。「 $1 \times 0 = 0$ だ。 $2 \times 0$ も0だ。その他のパターンも、黙となつて排除されていた欠如<sup>ゼロ</sup>。ソレを式に現すと、答えは必ずゼロになる。」

何でだと思う？」

・・・愚問だった。

そんなの僕には当に分かつていたことだ。

「 $1 \times 0$ は1が無いからゼロなんだ。」

でも、分かったぞ・・・。そうか、だからそうだったんだ。

「人は死ぬとゼロ(？ $\times 0 = 0$ )になるんだ。」僕は呟くようにハジメを見つめて言った。

ハジメは僕に頷き返す。口元の端を吊り上げて、ザワザワと黒髪を揺らめかせ、黒猫は今一度空を見上げる。

「死は欠如<sup>ゼロ</sup>なんだよ。俺たちの認識から消えてしまう。確実にその人はもう二度と動かない。止まった値に入ってしまう。」

よもすれば円形さ。ゼロって形が丸い様にね。ある種の完成型であり最下層の雛形。それ以上の変化を必要としない。パーフェクトな値。すべての値を内包した最初の値。それは答え、だろ？」

答え・・・そうか、よく考えてみれば方程式は解を0に合わせることにより完成するんだ。「0」につなげるのが数学でも完璧な答えなんだ。「0」さえ分かれば他のどの値にも結げていける。

こんな僕でも共感ぐらいはする。僕はハジメの話に少し思考の照準が合つて、一つの映像を思い出した。

「そうか、だからかなあ、前にさ、自殺者を見たことがあるんだ。」  
「へえ……。」ハジメは空を見上げながら耳を傾ける。  
僕もそんなハジメに合わせるように空を見上げた。

「その人、落ちる前に笑ってた。すうつごく幸せそうな貌だった。まるで、天国に行くみたいだに、清々しい貌で死んでいったんだ。」  
空を見上げて語る。なんでだろう？空にはその時の男の人の表情が鮮明に写っているように見えた。まるでゼロの上にその人の貌を代入するように……。

眩しいくらいの微笑み。何の束縛もない自由な表情。人はああも幸せそうに笑えるものなのか……。

「人はさ……。」ハジメが口を開いた。「生まれてから死ぬまで、答えを探し続けるんだ。それって幸せの探求って言ってな。俺たちは死ぬとききつとやつとソレに出会えるのさ。」

ゼロって言う不可知にね。」

そうだよ、分かったぞ。あの貌は難問で歪み続けた苦難の表情が解き放たれて自由になった、そういうときの人の貌だったんだ……。

「「0」に結ぶ方法は……幸せになる方法なんだ。」

「幸せになれるんだね。死ねば、人は……答えを知ることが出来るんだ。」

僕は彼に頷く様に答えた。そしてそんな僕にハジメは無言でニヤつと嗤って見せた。

蒼い風が吹く。冷たいけど懐かしい匂いがする。空は青い、ハジメは黒い。僕は、もうすぐ死のうと思つ。

死んだら何になるのか？死んだら何処に行くのか？それは結局分からない（ゼロ）。それでもソコに何があるかは分かるんだ。

きつとソコにあるのは

幸せと言う名の天国ゼロなんだろう。

「ねえ？コレって何なんだろう？」

僕はグリーンの地面に書かれてある、数式の「||」を指さした。  
二本の線が平行に並べられたその記号。それが何なのか？それがど  
ういう意味があるのか？それだけが一瞬、疑問に感じたからだ。

「経過だよ。経緯さ。」

ハジメは「||」を一瞥して僕に横目でつまらなそうに答えた。

「別に意味なんて無いよ。ソレはただの境界線だよ。分かつまで  
に起こる一種の歪みみたいなもんなんだ。俺もそれについてちゃあよ  
く分からない。ただ親父から聞いたことはある。」

「||」は道だつてさ。よく見たらそう言う形してるだろ？ソレ。  
ハジメは無感の視線で「||」を顎で指す。

確かに、その形は道のように両側を隔てられて真っ直ぐ前だけを  
強制された、そう言う形だった。

まるで自由とはほど遠い、そんな形だった。

「さ、メタな話はこれぐらいにして、もう俺は邪魔しないからか  
つてに死んでくれ。」

ハジメは”お終いお終い”と立ち上がって背伸びをした。コキコ  
キコキと背筋が音を鳴らす。

淀んでいた。

彼が、じゃない。僕が、だ。

僕は何だか、まだ大きな疑問を抱えたままの様な違和感が脳裏に  
感じられた。まるで作りかけのパズルをそこで完成にしてしまうよ  
うな嫌な予感だ。

だから、ふとすると僕は立ち上がって彼に言った。

「死ぬのは、また、今度にするよ。」

ピタつと彼の表情が止まった。瞳がキョロつとして僕を淀みなく  
見つめる。

「なんで？まさか怖じ気づいてないよな？アンタそういう貌して  
ない。最初から本気だ。」”どういうことか、わからない？”と彼  
は首をかしげる。

「まだ、終わらしてないことがある気がするんだ。何か、引つか

かるんだ。その「＝」っていったい何なんだろう？」

疑問を再度投げかける。結論、それが何なのかはつきりしないからだ。

道ってなんだ？原因しきから結果（答え）に到るまでの間。その間っていったい何の意味があるんだ？なんで人間は生きるんだ？生まれましてそして死ぬ間に何の意味があるんだ？時って何なんだ？時間って何の意味があるんだ？間っていったい何なんだ？僕は、どうして生きてるんだ？

ハジメは笑った。怪しくじゃない。今までで一番、普通の高校一年生の笑顔だった。

少し小賢しい白い歯を見せた笑いだった。

「・・・そつか。それは確かに・・・そうだな。見つかるまで探すしかないな。俺も出来る範囲で協力するからさ。アンタ、アレだろ？A型だろ？」

「え？よくわかったね。」

「ツハ、なら仕方ない。A型ってのは几帳面なんだ。そして几帳面ってのは自分にだけではなく、他人に対しても成果を求める行動ソレって客観的で思いやりがあるのさ。つまりは理解があるってこと。」

アンタ、分かんないことや、気に入らないことはほっとけないたちなんだよ。」

そう言つとハジメはクルッと反転してカギのかかった出口へ向かう。そして後ろ手を振った。

「じゃあ、またな。俺はたぶん毎日ここにいるからさ。死ぬときはちゃんと看取ってやるよ。カズ、アンタの完成しあわせの貌しやうってヤツをさ。」

ハジメはドア横の高い小さな窓をガラッと明けてよじ登って帰って行った。

屋上から見える景色はいつの間にか色を変えている。藍色、茜色、青色、3色ほどが緩やかに日の沈みを教えてくれる。

冬の日没は早い。沈みゆく太陽はまるで向こうの景色を燃やし尽くしていくように、まるで命の炎が消える寸前に勢いを増す様に、健気な雰囲気をしていた。

僕も燃え立つ太陽のように死ぬ前に、少し考えてみてもいいかもしれない。

去り際、誰もいない屋上で独りかぶりをふった。

さようなら、太陽さん。また明日会いましょう。

燃え尽きる太陽を看取ってカバンと遺書の手紙を持つ、そして僕は景色を振り返ることもなく、屋上を後にした。

今日の僕は少し違う。何故なら今日はとつても清々しい。本当に、半年振りくらいに・・・気分がいい。朝、家をでる時母がいつも通り心配そうに「大丈夫？」と声をかけてくれた。僕はその言葉に笑顔で「大丈夫」と返せた。学校に着いていつもどおり机を洗って、汚れてしまった制服も拭いて。独り窓際に腰掛けクラス中の会話に耳を傾けるぶん、今日の僕は自分よりもより余裕がある。

だからか、僕はその日、自殺を一時延期することにした。

少しやる事が出来た。死ぬ前に片付けてしまいたい問題が一つ、出来たから、僕はその日、自殺を一時延期した。

\*

ズキッ。

横つ腹が捻られるように痛む。さつきすれ違いざまにミドルキックを浴びせられたからだ。

いっどこから攻撃されるか分からない。だからこそ、いつも気をつけていなくてはいけないのに・・・不覚だった。

2階の西側男子トイレ。僕は独り口元の血を冷水で洗っていた。

もう、体中裸になれば痣だらけの僕の体・・・僕の大切だった体が痛めば心も痛み、体が癒されれば心も癒された。そんな体がどんどん、どんどん、傷つけられていく。痛いのは心なのか？それと

も体なのか？もうどつちかなんだか分からない・・・。

ボロボロに傷めつけられた僕は、地獄の様なこの毎日を半年以上も生きてきた。

そろそろいいだろう。僕はもう自由になりたい。早く、死にたい・・・。

蛇口を捻る手が強まる。僕はハジメの貌を思い出した。黒髪を闇のようにざわつかせた黒猫のようなその貌を・・・。

「「＝」つかあ・・・。」「いつたいどれだけ考えれば分かるんだろっ？」

締め切られたトイレは眩きを響かせる。

もう1週間も僕は問い続けてる。そのせいでいつまで経っても死ねやしない。

僕は毎日、放課後になると屋上へ足を運ぶ。そこから落ちれば死ぬる場所へ。でも僕はまだ死なない。まだはつきりしないことがあることが分かったから。僕は何で僕が死を選ぶのか？それがまだハッキリと理解出来ないことが分かった。

滝のように激しく激流する洗面器の蛇口。その流れは放っておいても、いつしか止まるのだろうか？あとどのくらいで止まるのだろうか？

寒い。冷たい。薄暗い男子トイレは凍ったように静かだ。ただ、蛇口から激流するその音だけが、一応ここを暖めている気がする。まるで雪国の暖炉の様に・・・。

そう言えばそろそろ今月も終わる。じき冬が来る。やっと、やっとだ。もう何年も、何十年も経つ気がするのに、一秒が一分、一時間が一曰、一曰がまるで一ヶ月の様に、

僕はもう、疲れた。

蛇口の水を無理に止める。雪国の暖炉の様な冷たい激流が、キュッと止まる。

そして男子トイレは静かに凍る。

僕はもう、死んでしまいたい。

戸が。

ガチャ。ドアが開いた。薄暗い男子トイレの開き

振り返ると夏樹正が立っていた。同じクラスの夏樹正が……。

「あっ」

目と目が交差し、夏樹正は悲鳴の様な声を落とし、視線をそらす。でも冷たい表情で、もう一度僕を見ると、冷水の様に冷え切った瞳で突き刺す。この空気にはちょうどいい凍った視線だ。

数秒か？もしくは僕にとっては長いが、平均的な時の進みからすれば一瞬だったのか、しばらく見つめ合うと夏樹正は逃げるように再びドアを閉めて去っていった。

あっという間に、僕を避けて去っていった。背は高くないが体格はがっちりした、クラスメート。同じ小学校、同じ中学校のクラスメート。本当はいつも笑っていて、本当はこの上なく暖かい瞳をずるクラスメート……。

ずいぶん……嫌われたなあ……。

気付くと深いため息がこぼれる。もう、戻れない日々が少し、胸のあたりが痛む。もう戻れない日々が少し、胸を温めて、それに戻れない現実が少し、胸を締め付ける。

男子トイレは冷え切って静謐に止まる。北側奥の窓が開けられ、そこからの僅かな外光が薄暗い明度を保つ。

避け去っていったクラスメートの貌が何故だか視界から消えない。そして僕は、

そろそろ、死んでしまいたい……。

\*

向き直り遠い遠い街並みを眺めると、一つ二つ、ここまでの経緯などを思い出す。

つまらない経緯。厄介な経緯。あの時あしておけば、こうしておけば……そんなこと今更関係ない。もう、過ぎ去ってしまった

過去へ、人間は戻る事が出来ないのだから。

「そういえば、カズってなんで自殺しようとしてるんだっけ？」  
それでもハジメに訊かれれば、その経緯も思い出すことになった。  
ハジメがそんな事を訊くのは珍しいどころか初めてのことだった。  
第一、ハジメは経緯に興味のある人間ではない。というより経緯には嫌悪感さえ抱いているふしがある。だからここまで一週間、一度もソレを訊いてきたことはなかった。

でも、さすがにこの一週間、僕たちは停滞していた。そう正に停滞と表せるほど、僕は前に進めないでいた。

「 $\pi$ 」という存在の意味。ソレを知るために無数に書き加えられた数式が屋上の地面に所狭しと散乱して、まるで屋上の給水ポンプの前に白い模様の絨毯を敷いた様に乱雑にひしめいていた。

僕達は、特に白い模様の絨毯を書いた張本人であるハジメは頭を掻いてチヨークを何本も折って思いあぐねていた。

その理由は簡単だった。

「 $\pi$ 」を求める式でも答えに行くまでには「 $\pi$ 」がある。書かれてあるすべての数式は「 $\pi$ 」の値を求めていて、そしてそうすると必然的にまた新しい「 $\pi$ 」が生まれてしまうのだ。

数式を立てて答えを導くと、また新しい問題が生まれる。こんな悪循環が僕らを停滞させていたんだ。

ハジメは最初からこうなることが分かっていた、と言っていた。だからハジメは物事の経緯が嫌いなんだと言っていた。そんなハジメが今日、初めて僕にソレを訊いてきた。どういう理由かは知らない。だけど、彼が数字以外に答えを求めようとしているなら、僕もがんばってソレを思い出し、そして、話すしかないと思う。

なんで自殺をしようとしたのか、ソレを説明する言葉は簡単に言えば一言。

ぼくは「いじめ」を受けたからだ。

青空の高い屋上。冬の空は高く高く青く青く、ととてもとても手が届きそうにない。

僕とハジメは仰向けに寝ころんでいた。

まるで並べられた人型クッキーみたいに白い模様の上に寝ころび、僕は空と向かい合っていた。

そうして空に向かい合いながら忘れることも出来ない忌々しい過去を、僕は隣の彼に順を追って説明を始めた。

\*

災厄だ。最悪だ。もう一秒でも先のことなんて考えたくはない。神様とか祈る段階はとつくのとうに終わらした。どうせ逃げ道なんて無い。まるで攻略できない迷路のように少しずつズレていった現実、今思えばある種運命と言う名の大計略にはまってしまったんだ。

それはそれは綿密に張り巡らされた周到な罠の数々。一つ避けたつてすぐに複線が張られてあつて、とても良い方向になど行かないきつとこのまま永遠に僕は落ち続けるのだろう。

もしもこの世に神様という存在がいたとしても、おそらくその神様では僕の今の状況までは救えない。いや？むしろ今の状況を創ったのは神様だとさえ思う。

僕にはよくわからないけど神様ってのは運命と違うかな？だって世の中を創ってるのは文字通り運命そのものだ。だとするなら僕の今の状況を創っているのはその神様だ。

そしてその神様が僕を選んでしまったんじゃない。逆らいうようがないもん。

それでも誰かはきつと僕に到らない所があつたから、僕が選択を誤ったから、と言うかもしれないけど、それは他人だから言えることだ。そう、あまりにも他人事。まるで真実を知らない人が口にする偏見。

それでもコレから抜け出す方法があつたかもって？

ちよつと、待ってくれ。そりゃ無いよ。僕は悪くない、そうだろ

？だつて僕だつてここまでできる限りの努力はしたさ。

初め、入学当初、4月も半ばを過ぎた頃。

「ゴミはキッチンとゴミ箱に捨てなよ。」

その一言がいけなかったと言えばソレまでだ。でもまさかソレがこんな事態につながるなんて相当用心深い妄想家でしか予想し得ないことだと思う。

思い出してみると、あの時ゴミを捨て損ねた松本隆は僕を睨み、少し間をおいてからニヤリと小さくほくそ笑んだんだ。きつと、そのときから彼の中でゲームが始まっていたんだらう。

次の朝、学校に来て自分の机がゴミ箱と化していた。

「ゴミはゴミ箱に、だろ？」

小さな悪戯は自分達からアヒヤアヒヤと笑い声を上げて名乗った。松本隆とその友人の高橋徹他2名の合計4名のグループ。

その時僕は悪戯に怒りで返すと逆効果だ、と判断して無視して汚れた机を新品のごとく綺麗にして見せた。机の脚の先まで丹念に。今思えばその判断は間違っていたのだらう。でも、今更、もし、だったら、ああしていれば、は無しだ。そんなこと言ったらキリがないから……。

次の日からはエスカレーター式で悪戯はグレードアップしていった。ゴミ箱になった机は廊下に投げられていた。

ガキっぽいと溜息をついてソレを所定の位置に戻し、再び綺麗に汚れを拭き取っていると、後ろからモノを投げつけられた。

カチンときて振り返ると、昨日まで4人だった奴等は2人増えて6人になっていた。アヒヤアヒヤアヒヤと嗤う声も盛大になっている。正直少し、その時から不気味な予感を感じていた。

嫌がらせは毎日続けられた。段々、さすがに黙っていられなくなつたある日、覚悟を決めて登校すると、僕の上履きが下駄箱から消えていた。

少し探してみるがすぐに考えを改めて、勇み足で彼らのところへ怒鳴り込もうと教室のドアを開けた。そしてたぶんその時初めて僕

はその状況の正体を理解したんだろう。

クラスはいつもどおり人々の会話で騒然としていた。僕の机は相変わらず汚されていても、教室の外へ放り出されているわけでは無く。でもその有り様はまさに、イメージ通りの姿だった。

僕の机を避けるように周囲の机は弧を描き距離をとっていただけの変な形。周囲の人間達に話しかけようとするが無言に避けられるシカト。

いったい何が起こったのか、ソレが何を意味するのか、思考する必要もなく僕は自覚した。ああ・・・僕は今、イジメを受けているのか・・・と。

松本隆と高橋徹の二人を主犯として、1年2組は団結して縁上和成をいたぶる事に決めたのだ。

僕は松本隆や高橋徹のグループに何をされたってよかった。別に相手にしなればいいし、行き過ぎだったら殴り合っても抵抗する心がけがあつた。でもクラス全体を敵に回すなんて予想だにしなかつたこと。知らない間に増えていた敵。どれもが突然で、まったくの不意、事実僕はその時両方の足で立っていられず、漠然としたまま汚れて嫌煙された自分の席に墮ちるように座ることしかできなかったんだ。

正直、僕は少しなめていたのかも知れない。人を信じすぎていたのかも知れない。イジメというものをもっと身近なモノとして警戒出来ていればこんなことにはならなかつたかも知れない。だけど今更そんなことを言っても後の祭りなんだ。

「大丈夫かよ？」

親友の夏樹正に慰められて僕はそれでも毎日学校に通った。

歩いていると背中から物を投げつけられる。ゴミだけじゃない、生卵やその他の生ものだって時には投げつけられる。随分用意周到だ。手の込んだことをよくやると感心してしまう。カバンを隠されて放課後親友と一緒に校舎中を探し回ったけど、結局見つかったのは次の日の朝、机の上。

上履きに異物が入っているのは毎回だから上履きはいつも持ち帰り。人に話しかけても無視されるか「ウザイ」「クサイ」「キモイ」のどれかを言われるだけだ。ずいぶん嫌われたものだ。

いつたいどの時代の学園ドラマだ、って思うような彼らの陳腐な発想力が思いつく限りの嫌がらせ。そしてそれに俄然と対応すると彼らの嫌がらせはますますエスカレートしてしまっただけだった。

机は壊されて多数決で僕自身がやったことにされた。カバンはついに戻ってこなくなった。上履きや体操着ははさみで今風ってわけじゃない、ただ単に涼しいものに変えられていた。

4月5月6月を耐えたがもう我慢の限界とプライドをかなぐり捨てて担任教師の市原清一に相談した。でも、その結果は、じっくりゆっくり自分でもどうやったら解決するか考えるよう諭されただけだった。そして挙げ句の果てには

「君にもどこが悪かった所は無いのか？」

だって。もういいよあんたじゃ話にならない。どうせ自分の保身のことしか考えられない困った大人なんだ。

しかたない、もうこうなっては仕方ない正直、僕は自尊心が高いから、自分がイジメにあっているなんて人に知られたくない。そして両親には一番知られたくなかった。それでも親友の説得もあつて親に相談することにしたのはもう、夏休みに入っていた7月の終盤のことだった。

母は何となく気付いていたと言い、すぐに僕の言うことを信じてくれた。やはり毎日のように汚れる服や、使えなくなった体操着など、よく考えてみれば不信な点はいくらでもあつたのだ。そして期待通り父とも色々話し合つて学校にも問い合わせてくれた。

けど結局それも、うちのクラスの担任はあれで口がうまくて、良いように説明されて丸め込まれて「もう少し、あと少し我慢するしかないわ。きつと先生が何とかしてくださるから」だって。何にもしやしないよアイツは。がっかりだ・・・最後の頼みの綱の親も役にはたたない。



彼らはアヒヤハハハつてさ。

殴られ、蹴られ、骨が軋み、肉が打たれ、痛みが全身を覆う。

醜いよお前ら・・・汚いよお前ら・・・何も痛い思いもしないで、なんで正常面せいじょうめんしてるんだよ。

言葉や持ち物に対する暴力はもつと物理的な方向に成長した。誹謗中傷や持ち物を隠したり盗られたりするうちは人間として扱われている分は救いようがあったかもしれない。でも、体を傷つけられるのは肉体という生物としての僕のベースに危害を加える行為。コレって精神的じゃない分、逆に精神のある僕には精神的に極度の苦痛を感じさせるんだ。

繰り返される罵声と暴力は僕に、彼らの言っていることの意味、そして自分のクラスでの立場を理解させるには充分すぎた。

もう彼らにとって僕は、人間じゃないんだ、という現実を、僕は深く深く心に刻み込まれた。

「僕は伊藤さんが好きだな。」

「へえ？カズって大人しい系、タイプだよな。」

小学校、中学校の頃からの親友、夏樹正。彼は僕と一緒にこの高校に入学した。受験勉強も一緒にやった。お互いに好きな子が出来ると教え合うのは当たり前だった。彼は高校一年の最初からコレのターゲットにされた僕を陰ながら支えていてくれた。

自分だって僕を陰で支えていると奴等から「おまえ、アイツと話すの止めるよ。」と何度も警告を受けていたのに、それでも親友は僕を支え続けてくれていた。彼がいたから僕は運命に立ち向かい、学校にだって登校し続けられたんだ。

そんな大切な親友がいた。でもそんな親友も一つ皮をめくれば他のヤツラと変わらない悪魔だったって知ったのはついこの間のこと。10月に入りもう持病と化した胃痛や頭痛を抑えて僕は登校をした。

教室に入ると中には久しぶりにちゃんと僕の席が正しい位置に置かれていた。しかし妙な違和感とクラスメート達のニヤついた嗤い。

ああ、何か企んだな？と僕はすぐに分かった。

いつものことだから・・・もう何があっても驚きも悲しみもない。耐え続けるのにも慣れてきたから。頭痛も胃痛も、持病と思えば耐えられないこともないから・・・。僕は害虫の様にひっそりと耐え続けていればいいんだから・・・。それでもソレを見たときは、正直シヨックを隠しきれなかった。

机の上には赤いチョークで「美樹ちゃん犯したい」と書かれてあった。丁寧にそれを表す落書きまでしてあって、落書きの中の美樹ちゃんは「止めて！ゴキブリとは出来ないわ」とコメントしていた。目眩がした。僕だけならまだしも、彼女まで・・・。さてよ？なんでヤツラが僕が彼女を好きなことを知っているんだ？

ふと僕を囲むクラスを見渡すと答えはすぐに分かった。

クラスの中、端っこで凍ったように人々の陰に隠れている親友を見つけたんだ。

親友はその時、僕と視線を合わせるのを避けた。

まさか・・・とは思った。でも本当に、彼は僕を裏切ったんだ。

そして後ろから肩をたたかれて振り返ると伊藤美樹ちゃんが立っていた。

美樹ちゃんは青ざめた冷たい貌で、すごく嫌そうに僕に向かってその時一言こういったんだ。

「もう、近づかないでください。」ってね。おどおどしながら、一生懸命に自分の身だけを案じて、大人しそうな彼女はこれ以上耐えられるボーダーラインの無い僕をドンッと突き落としたんだ。

周囲を見回すとクラスメート総勢34名は僕一人を中心に和を描いてケタケタと怪しく晒っていた・・・。親友も好きだった女の子も・・・みんな、僕の側にはいないんだ・・・。

こんなことって信じられる？何時なのさ？いつたい何時からなのさ！？ねえ？誰か教えてくれよ？何時から僕は、

独りだったんだよ

キツカケは些細な注意。ゴミを投げてゴミ箱に入らなくてもその

ままにするなつて注意して始まつた喧嘩。

最初は些細な悪戯。少人数の一部グループから発祥した病氣<sup>いじめ</sup>。

イジメと解釈するのはプライドが許さなかつたけど、それはイジメを増長させただけ。生まれてこの方イジメを見たことはあつても体験したことはなかつたから、本当は最初少し新鮮だつたイジメ。

彼らは僕をイジメることで段々、中毒的な快感を感じるようになったらう。そう、もう止められない魅惑の果実を喰む様に僕を傷つけて、嗤うんだ。その中毒症状は彼らの中で慣れを生じさせ、その慣れによりさらなるイジメの過激さを求めさせた。彼らはドンドンドンドン、僕を壊す方法を飽くなき嗜好で考え出し、ことごとくを実行した。本当に・・・どん欲なまでに、快樂を求めて・・・。

親友が口もきいてくれなくなつて、好きな女の子には突然フラれて、気づけば周囲に僕は独りだつた。いや、元から僕は独りだつたんだ・・・。今思えばもつと早くに気付くべきだつたんだ、僕にはもう、頼れるモノなんていないつて現実に。

神様<sup>うんめい</sup>がここまで来いつて言うなら行くしかないんだ。天国<sup>そら</sup>と言う名の最高の樂な世界<sup>パラダイス</sup>へ。

\*

「そして、自殺を決意した？・・・なるほどね。」

話し終わると追憶から空に景色が戻つた。

隣で寝ころぶハジメは眠たそうにまぶたを半分開いて微笑を浮かべている。

「優性劣性の法則つて知つてるか？」

僕が無言でいるとハジメはそんな法則を口にした。空と向かい合つたままコツチを見ずに・・・。

僕が返事をする変わりに視線を頭ごと彼に向けると、ハジメはニイツと笑つてそのまま話し始めた。

「生物学上の重要な法則だよ。でも生物学だけにある法則でもな

い。実は人間だってそうなんだよ。

集団の中で優勢劣勢は必然的に生まれる。優れてる人と劣っている人は必ずランキングされるだろ？

そしてその中で誰だって優勢で在りたがる。誰だって低いより高いほうが安心だ。生物だって交配をすれば劣性遺伝子より優性遺伝子を選ぶんだよ。

優性劣勢というのは優勢があるから劣勢がある、劣勢があるから優勢がある。そう言う相互依存の関係に成り立ってる。とはいえその依存関係は人という字のごとく理不尽で、一方の負担が圧倒的に大きい。つまり優勢であるほうがその名の通り有利なんだよ。

だから今回のカズの場合、ヤツらは自分たちが優勢でいるためには誰かを劣勢にする必要があった。そしてソレに晴れてアンタは当選してしまっただってわけだな。

イジメってのはそういうもんだろ？」

” アンタが選ばれなければ誰かが選ばれていたさ” と付け足して、ハジメは気のない目線で僕に頭を振る。

「そうかも・・・しれないね。」僕は小さく頷いた。

でも、今更そんなことは無しだ。僕じゃなければ、とか、他の誰かだったら・・・そんなこと言ったらキリがない・・・。

寝ころんでいた姿勢から起きあがると、まだ仰向けのハジメを見下ろして一つ文句ってわけじゃないけど、彼に訊いてみる。

「ねえ、僕はいつまで死ねないんだろう・・・。」

冷たい風がヒュルリと首元を滑る。ハジメは仰向けに僕をキョロつと一瞥すると、無言で起きあがり、そしてふうつとため息をはいた。

「おいカズ？アンタ勘違いしてるみたいだけどさ。」「」を知りたいっていったのは、アンタだけ。俺はそれに協力してるだけ。

別に死にたきゃ、今すぐ自殺してくれてかまわない。アンタの最後を看取る約束は果たすさ。」

「・・・」チクリと突き刺さるような言葉を言って、ハジメ

は眠たそうな目をして笑みを浮かべる。

そう、だよなあ・・・全部、僕のかつてなジレンマだ。ハジメに訊いたってダメなんだ。ああ、悪循環にはまってしまった気がする。僕が半分いじけてしょげているとハジメは”そうだ”と口を開いた。

「俺さっきの話から気になってたんだけどさあ。カズが標的にされた発端は分かった。たぶんその後のもろもろの飛躍もクラス内でそれに追隨するアンタのその行動を嫌がったヤツらがいたんだろう。それにイジメの原理である、優勢劣勢の法則な。

でも一つだけ原因が抜けてるものがあるぜ。」

「・・・なに？」僕はハジメの言っていることに心当たりがなく、問い返す。

「親友だよ。」

「・・・え？」

「だからアイツが何でアンタを裏切ったのか？ソレだけがアンタの説明では「突然」なんて曖昧な言葉で終わらされてた。

突然なんて、そんなこと絶対有り得ない。答えがあれば必ず式があるもんなんだ。一つ値がゼロのまんまだぜ。」

ven

(B)Hea

夢を見た。そして大事なことを思い出した。

それは夏休みが明けたばかりの9月のことだった

ひよっとしたらこの一ヶ月半の期間に彼らの流行病は過ぎ去っているかもしれない。飽きっぽい現代人かれらならあり得るのではないだろうか？などという幻想を夢見ながら期待を胸に登校し、僕は現実を痛感することになった。

無論、イジメは飽きられることもなく持続していたのだ。しかもそれは、ある意味劇的な方向転換を開始していた。

朝HRの少し前、周りから嫌煙された席に座って、なるつたけ大人しくしていた。

四方から聞こえてくる人々の日常の会話、それに混ざる権利を僕は根こそぎ奪われているから。大人しく、ただ、大人しく。ただ静かに自分を押し殺すだけの時間は途方もなく長く、途方もなく無意味。そんな無意味に長い時間の中、ソレは突如起こった。

バサつと髪が揺れて、何かがズキつと奪われた感触が頭部の後ろをよぎる。

「っつ！」振り向くと言葉にもならない光景が・・・息をのむ暇も与えてくれず、脳が状況を把握しきるのにスローモーションで3分はかかった。

正面には法採用の大きなハサミ、ソレを握って奇怪に嗤うクラスメート・・・。

ゆっくりゆっくり、意識の誘導に応じて手を後ろ頭に回す。視界の無い手探りでその部位を確認、そしてその欠如した感触をモロに脳が捉えた。

髪が・・・切られた。感触は形を成して僕にその姿を伝える。彼と僕との間の床にはソレまでの経過のあらずじが散乱していた。黒い毛の束となった髪がこんなに・・・僕だったもの、僕だった部分、ソレがこんなに・・・殺された。

無残にも殺された部位の・・・ああ、なんてヒドイ光景を、目の当たりにして正気でいられる人間なんていない。

終にコイツらは僕の体にまで侵略ってきた。僕の周りだけじゃなく、僕の体<sup>なか</sup>まで、奪おうとしている

「高橋！おまえ！」ズンつと彼に襲いかかる、はずが、ズンつと、ズンつと？ 動かない。体が手を回されてる・・・

後ろから？

「止める！離せよ！」いったいどういうことだ？僕は僕を殺したヤツを殴らなきゃいけないんだ！お願いだから離してくれよ！

怒りで視点が定まらない。まるで夢でも見ているようにボヤけて・

。。。

ドスつと、今度は痛みを伴った。

腹のみぞおちを思いつきり、息が縮こまる、痛みと言うよりも全身の不快感。ソレとともに僕はその場に倒れた。

背後からの拘束が解かれて、這い蹲って藻掻く僕は見下ろす彼らを呆然と見上げると彼らは、  
嗤っていた。

悪魔みたいにテカテカとケタケタと全身を震わせて、狂喜していた。ヤツラだけじゃない。見まわせば分かる。みんなだ。みんなが僕を、嗤ってる。

まるで無数の三日月が小刻みに震えながら・・・僕を、なんて目をして見るんだ！

人間を見る目じゃない。コイツらは僕を人として認識していない。やつと気がついた・・・僕はここでは人間じゃなかったんだ、と。

「大丈夫かよ？」

相変わらずの言葉とぬれたタオルを手渡す親友は同情一色の貌を歪める。

「大丈夫だよ・・・」親友の差し出す同情を無造作に受け取るタオルと殴られて腫れ上がった口元や額を拭う、僕は傷だらけだ・・・。

「なあ、やつぱりもう一度、親とか教師に掛け合ってみた方が良くいんじゃないか？市原は当てに出来ないとしてもさ。」

「無駄だよ。もうさんざん言ってきたじゃないか？不可能だ。アイツらじゃ僕を助けることなんて出来ないね。」吐き捨てる。役立たずな教師と頼りにならない両親、そいつらに僕のこの状況をどうやって救う手だてがあるって言うんだ？

「カズ・・・おまえ、言い切るなよ。あきらめたらずーつとこのままかもしれないんだぞ？いいのかよ？」

「いいわけ無いだろ！？」カチンときた。親友は突然怒鳴られて少し怯む、。

「なんだよその目は・・・」僕を侮蔑したような目だ。コイツは

何も分かってない。僕のことをただ可哀想なヤツって目で見て同情して気持ちいいんだ！だいたいコイツだってそうだ。

僕がイジメられてから結局コイツだって表だつては僕と喋りもしなくなつてきてる。その上、今日だつて僕がアイツらにリンチされてる間も止めることさえしなかつたんだ。

「な、何だよ？なに怒こつてんだよ、カズ。」

体よくなだめに入ろうとする親友を右手で拒絶する。パチッと音を立てて彼の差し出す手をはたき落とす。

「もう、うんざりなんだよ！同情されるのは・・・おまえだつて思つてるんだろ？いい加減コイツの世話をやくのは面倒だつてさ！正直に言えよ！タダシ。」響き渡る、自分の声が・・・狭い男子トイレの中に。まるで全てを終わらすように・・・僕はタダシの顔を睨み付けた。

その不満そうな生意気な貌を、その穏和な太い眉毛がハの字になつている表情を・・・僕は睨み付けて最後にこう告げたんだ。

「もう僕にかまうなよ。悪いけど迷惑なんだ。」

静かにただ冷静さを取り繕うように、僕の言葉は男子トイレに響き、何もかもが終わるようにタダシは一言も言わずドアを閉めていった。

怖かった。僕はあの時、タダシも他のクラスメートと同じように僕を見ているのではないかと想つて怖かつたんだ・・・だから僕は・・・ソレなのに僕は・・・逆にタダシにそう言われる前に・・・。

タダシはその時、どんな貌をしていたらう・・・、今はもうよく思い出せない。

今思い出せるのは・・・親友だった人の、親友だった頃の暖かい頼りがいのある照れた笑顔だけ・・・。失ってしまった大切な思い出だけ・・・。クラスメイトや教師や親に対する怒りをすべてぶつけるように、僕はこのとき彼に小さな八つ当たりをした。

今思えば、それから夏樹正と僕は口をきかなくなつたんだ。

今思えばそのことが彼が僕を裏切る原因の一樣に重大な事だったのかも知れない。

今思えば僕は、自分から自分をひとりぼっちに追い込んだのかも知れない。

「へえ・・・そつか。やっぱりあつたんだ、理由。」

誰もいない僕らだけの屋上にそよ風と一緒に眩きのような返事が答えた。

「うん・・・たぶんずっと忘れてた・・・キミに言われるまで・・・僕も彼に頷き答える。」

ハジメは相変わらず眠そうに瞼を垂らし微笑を浮かべている。黒い髪をざわめかせ、ただ真実だけを求めるように、僕を横目に見据えている。

「アンタは甘えてたんだよ。」ハジメは大きなため息のようにそう吐いて、おもむろに空を見上げた。

もう、空を見上げるのはここでの定番になっているから。僕は、彼のその言葉の続きに素直に耳を傾けた、同じように空を見上げて「人間ってのは甘えると人に寄りかかる。何でもこの人なら分かってくれると思いいこむ。だから八つ当たりも平然とやってしまう。長い間仲の良かった関係は逆にアンタらの間に甘えを作ってた。

だからアンタはあまり気付かずヤツを傷つけてしまったのさ。信頼関係と甘えは直結する。人は馴れ合うと限りなく相手を信じて頼っちまう。ソレっていいことかも知れないけど・・・ソレってすごく困ったことなんだよ・・・。」

”アンタ、夏樹正に言うべきことがあるんじゃないの？”とハジメは付け足した。

僕も、少し、そう思った・・・。

ただそれでも、その時彼がどんな貌をするのか、想像するだけで僕は怖くて・・・僕は恐ろしくてどうにかなくなってしまいそうで・・・とてもハジメの言うようなことを出来るほど、そんな勇氣ないんだ。

。。 タダシが僕のことを笑って許してくれるってことを僕は信じられないんだ。

僕はタダシのあんな冷たい貌を見てしまったから。僕はタダシにあんな酷いことを言ってしまったから。もう、後戻りが出来るなんて。。。信じられない。。。。

「ねえハジメ。。。キミはすごく気まずくて怖くて、怖じ気づいてしまっつて感じるこことつてある？」

遠くを見つめる彼に、僕はうつむくように同じ空を見上げたまま自然にそんなことを訊いた。

「あるよ。。。」「ハジメは小さく答えた。

意外だった。。。彼は。。。ハジメは人と人の間に生まれる摩擦とは無関係な、そんな無軌道な自由さを持つていたから。。。そんな彼がそんなものを感じることがあるなんて、意外だった。

「でもさ、そーゆーのつて大概思いこみが生んでるウソなんだよ。」「言つてハジメはスつと立ち上がった。「本当は気まずくて何も出来ない方がよっぽどまずいんじゃない？」

見下ろして僕を見抜く。その何かを見通したような瞳を見返すと僕は少し、気がついた。

ああ。。。そうか。。。僕は自分で自分を。。。いつもこうしてしまうから、勝手に弱くなってしまうから。。。だから、僕は独りになってしまったのかもしれない。。。。

僕はタダシに言わなくちゃいけないのかもしれない。。。もうソレが手遅れだとしても。。。死ぬ前に。。。彼に謝らなければいけないのかも知れない。。。

僕は立ち上がり見下ろすハジメに小さく頷いてそして自分も立ち上がつてみた。

立つと景色は広がった。青い遠い空だけだった景色の下に僕達の街が生まれた。

景色は空と同じで遠いことに変わりはない。でもその遠さはすごく懐かしくて空よりずっとにぎやかで、優しく、触れて掴め

るような気さえした。

そして僕には、そんな景色が少し暖かくて、そんな景色が少し近く感じて、勇気をくれるような気がして、少し嬉しいと思った。

「言うことを言えない事の方が、よっぽど怖いんだね・・・きつと。」

誰に言うでもなく空に呟いた。そしてハジメはその時隣できつと笑っていた。そよ風が吹く学校の屋上で、僕は一つの式を立てた。

その式がどんな答えに繋がるのかはまだ分からない。でも、その式を実行すれば、きつと何か答えが返ってくるということだけは確信できる真実だったんだ。

\*

次の日の朝、僕はまた学校に通った。

いつも通り排他された自分の席に着くと、なるっただけ周囲を見なように視線を落とし、机に向かい合う。習慣だ・・・。

出来ることならクラスを賑わす雑音の数々も聞き取れないように耳をそぎ落としてしまいたい。それくらい僕は、此処が嫌いだ。此処にある物も此処にいる人も此処にいる自分も、僕は嫌いで嫌いで・・・耐えられそうにないんだ。

息を殺す害虫のように教室の角の隅でうずくまるように座っていると、まるで僕だけが此処にいるのに此処にいないみたいだ・・・。それでも時々、「何か臭くない？」とか「おまえ臭うから消えてくんね？」などという中傷罵声それに軽い暴力だけは飽きずに飛んでくる。

みんなそれぞれストレスが貯まるとゴミ箱に捨てるように代わる代わる僕を痛めつけて、癒されてるんだ。

もう僕に対するイジメはこのクラスの習わしとして完全に定着している。

今の僕の一日はこうだ。一般的な誹謗中傷や軽い暴力の他に日課

となつてゐる朝のあいさつと昼飯時のおつかいと教育。そして時々、彼らが暇なときは放課後学校の外に連れ出されることも幾度かあった。

もろもろは全て主犯となる松本隆率いる6人グループのもてなしだった。

でも最近の外に連れ出されることもほとんど無くなって暴力や暴言の過激さも増すことも減ることもなく、彼らはここに来てやっと滞つてきているのが実情だ。

それもそのはず、彼らはここ半年以上もの間光の速度でイジメを過激化していたのだから何時しかネタも尽きて停滞するのは目に見えていた。ただ・・・それが何所までで止まり、僕自身がその時点でどの程度傷つけられているか・・・それだけが僕の命運を分けただけのことだった・・・。

そしてどうやら僕は、この長い長い一日の日課を何所まで続けるか分からないその日まで耐えるなんて、想像も出来ないほど再起不能にされてしまったわけだ。とは言つても僕はまたどうしてかこうして学校に登校して最も嫌いな自分の席に座っている。

周囲の雑音に耳をそばだてるわけでもなく、かといって何か他に考えるような事もみじんも感じない。ただ、ボーッと瞼を半開して、ただボーッと意識を空気に融かしているだけだ。それだけで・・・そしてソレだけでも僕は・・・。

正面に見えるのは机とソレに乗せている自分のらしい両腕、袖もとが黄色っぽい染みで汚されている。紺色のブレザーの袖には目立ちすぎる染みだ・・・。まるで浮いている。

他の部分からすればちっぽけな染みだ。でも染みのある部分だけ他とは違う色で他から切り離されて・・・こういうのを人は、汚れているって言うんだろっ・・・。

マイノリテイは何時だつて汚れ役・・・劣勢を担がされ他から切り離され、耐えようもない孤独が身体の芯から冷やしていく。

空しい・・・。劣勢が滅びのステップだとすれば僕が下した決

断は正当化されるけど・・・それってなんだか味気ない。

どうしてだろう？僕は死にたいはずなのに・・・死ぬのはなんて憂鬱なんだ・・・。だって、そうかだからか・・・ハジメの言った通りかも知れない。

僕が死なないのは「」を知らないせいなんかでもハジメに付き合っているせいなんでもない。ただ・・・僕が臆病なだけだ。屋上のフェンスの外側から見た地面の小ささに・・・いつの間にかリアルな死への恐怖を感じていたんだ。

もっとしつかりしなくちゃ・・・しつかり。

机の上で組んでいた両腕の肘をそのまま左右の手で強く鷲掴みにする。そうして自分に言い聞かせているんだ。早く死のう・・・と、もう、今日死のう、と。

「何だ？それ」

ふ、とクラスのざわめきの中で一つの会話が聞こえてきた。なに、そんなに不思議なことでもない。いくら僕が周りの会話なんて騒音ぐらいに思っているといっても常に気を配っていなくてはいけない相手というのはあるもんだ。それに彼らの声ときたら、僕のいる教室の廊下側の三列目とはほど遠い窓側6列目、つまり教室の一番端の席なのにその間のいくつもの人々の会話を妨げともしないで一直線に僕の耳に届くほど大きいのだ。まるで自分たちの存在を主張しかつその力を誇示するかのような振る舞いだ。

「似てねえよ、ちげえだろ。こうだべ、ヘタクソ。」

気付かれぬよう視線を向けるとどうやら彼らは机の上に落書きをしている最中らしかった。いつも通りの六人グループだ。みんな総じて態とらしいダラけたファッションで制服を着こなしていてグダグダしたしゃべり方、それでいてピアスなどの過激なほどの装飾をしているわけでもない。要するに中途半端なんだ。

六人はいつも通りの事をやっているにすぎない・・・だけど僕がこうして少し反応しているのは、彼らが少しいつもと違ったからだ。いや、正確には彼らの中の一人が、明らかに色を逸していたように

思えた。

「ああ、ソレ知ってる。アレだべ？アレ？」

「ああ、こないだのテレビでやってたってやつ？」

「あん？何か言ってたな？」

「俺の一個上の先輩これチョーうめえよ。マジで。」

そう、彼らの会話は普通だった。お互いの机に落書きをしたりするのはよくあることだったのだ。でもただ、その一人落書きをされている机の張本人高橋徹を除いては。

貌が青かった。目がうつろだった。そして友人達のグダグダした会話にも混ざろうとはしていなかった。とにかく何か怯えているのか時々クラス中を強ばった視線で見まわしたりする。そしてその度に僕は貌を伏せて隠れなくてはいけなかった。その様子はまるで追いつめられていく小動物のように危うく思えた。僕には今の彼のような表情に身に覚えがあつたせいで、彼の症状に心当たりを感じて、ソレについて少し考えてみた。

高橋徹とその周りの五人は松本隆率いる六人グループでクラスの中ではそれなりに派閥を効かせている連中だ。いや、この一年二組では現在最も権力のあるグループと考えていいだろう。実質僕がこんな状況に追い込まれている原因は彼らなのだから。彼らにはクラス全体を動かすぐらいの動力が存在しているのは事実だ。

そんな彼らだが入学当初からいち早くそのグループを形成し、早くも共通の的を仕立てて確固とした集団形成を確立しただけあつて、そう脆い連中でもなかった。つまり彼らはわりかし仲が良かったのだ。そして現在高橋徹が一人淀んだ空気を噴出しているも他の五人と喧嘩をしているようにも思えなかったのだ。しいて言えば高橋徹は松本隆によく顎で使われるような事が多くあつたので、その度に高橋がムスツとした態度を取っていたのを僕はよく覚えている。もしかしたらそんなことと何か関係があるのだろうか？しかしそれも僕が標的にされた入学当初からほとんど松本のターゲットは僕自身に切り替わっていたのでそう被害は無いはずだった。

松本隆と高橋徹は中学校の頃からのつきあいだったらしいので、コに何か関係があるのだろうか？などとも考えてみたが、そんな前から何か仲が悪いなら同じ学校を選んでわざわざ入学することもなかっただろうし今更って気もするとも思った。とすると高橋徹は何かグループ外でのいざこざに巻き込まれたのだろうか？それなら確かにクラス中を探るように見まわす彼の不審な行動にも何らかの疑惑を抱いているとすれば納得がいく。しかしそれにしては周りの五人はなにも警戒している様子はない。どうやら仲間には何か相談しているわけでもないようだった。

困ったときに相談するほど信用をしていないのか、それとも何か都合の悪いこともあるのか？とにかく分かることは高橋徹が何らかの危機的な状況にいることだった。

何故分かるか・それは、彼が一昔前、イジメが始まった当初の頃の僕と同じ行動を繰り返しているからだだった。

何かに怯えて周りを敵視したような疑惑の表情と多動症のような貧乏揺すりや細々とした四肢の動き、キョロキョロ見まわす視点の定まらない視線。何かその正体をはっきりさせられていない様な挙動は・・・そうだ、どう考えてもコレは、あの頃の僕だ。

そして次の瞬間事が起きた。

「うるさいよっ！！」　っドンという机を叩く音とともに高橋徹が勢いよく立ち上がった。彼の上げた大声で一瞬クラス中が静まりかえる。そして何事かとどよめきがおこり始めたとき松本隆がつまらなそうに高橋徹を睨み付けた。

「何だよ？トオル。」　めんどくさそうに口元を引きつらせて松本隆が言う。「何いきなりキレてんだよ。最近変だよ？おまえ。」　迷惑そうにそう言われると高橋徹は仲間だった五人組を睨んで気でも違ったように貌を真っ赤にして怒鳴り声を上げた。

「うるさいよ！！おまえらにはわからねえよ。」　そう怒鳴って数秒もしないで荒げた呼吸を落ち着かせるように「クソっ」と誰に言うでもなく吐き捨てて、早足で高橋徹は教室を出て行った。

後に残された五人組は「何だ、アレ？うつぜ。」などとブツブツ文句を呟きあつた後。沸々と怒りがわいてきたのか周囲にいる者達に見境無く「なんだコラア！？コツチ見てんじゃねえぞ！！」と怒鳴りつけると椅子を蹴ったり教室の後ろのロッカーを殴ったりした。どうやら彼らは仲違いをした。僕は少し良い気味だと感じた。それも当然だ。僕は彼らの最大の被害者なんだ。この騒ぎで迷惑したクラスメート達なんかよりずっと、僕の方が彼らに迷惑していたのだから。僕はこの思いもよらない出来事で少し微笑を浮かべていた。それでもあまり大仰に喜んではいけない。目立ってはいけない。八つ当たりの標的がもつとも適しているのはこの僕なんだから。この時のために僕は聞きたくもない彼らの会話を聞いて動向をつかがつていたんだから。

何とか被害を避けるために僕は騒ぎに乗じてゆっくりと立ち上がった。なるべく気配を悟られないように、教室から出ようと高橋徹が出て行ったドアとは反対のドアへ歩みを進める。

目立ってはいけない。気付かれてはいけない。彼らの目に僕が映れば間違いなく攻撃の対象はロッカーや机なんかではなく僕に向かうだろうことは確実だからだ。

ゆっくりゆっくりスムーズに無駄なく僕は真っ直ぐ出口へ急いだ。出口前のドアを目の前で僕は思った。（出口だ・・・）と。どうやら今回はうまく切り抜けた。しかし、次の瞬間その悲鳴が聞こえたとき僕は振り返って反対側へ向かわなくてはいけなかった。

「やめ・・・やめ、てっつ・・・。」

弱々しい悲鳴だった。恐怖で引きつった感じが微弱だが言葉をハッキリさせていない。どうやら松本隆がクラスメートの伊藤美樹に絡んだようなのだ。

松本隆は伊藤美樹の細くて白い華奢な腕を鷲づかみに持ち上げて「なに見てんだ？コラアツ！！」とものすごい表情で脅かしている。美樹ちゃんは今にも泣き出しそうな顔で腰を落としている。なんてヒドイ光景だろう。彼女の泣き出しそうなつぶらな瞳がなんて痛

々しいんだろう・・・。

松本の隣の野田浩一は松本を止めるように肩に手を置いて何か言ったが、松本はその手を振り払った。野田は女にモテていると同時に女に手を出さない不良だった。しかし結局は松本の尻尾の一つのようなものだ。彼の気迫に気圧されてすぐに身を引いてしまった。でもそんなことは僕にとつてどうでも良かった。僕はその時自分で自分の体をコントロール出来ていた気がしなかった。いや、体を制御できなかったんではない。たぶん、それは心を抑えることが出来なかったんだ。

しかし信じられない。まだ僕にこんなことをするほどの気概が残っていたなんて。

次の瞬間には僕は駆け込んでいた。彼らのステージへ。その許せない光景をもみくちやにしてやりたかった。なんて非道なヤツラだ！鼓膜の奥底で何度も僕はいきり叫んだ。彼女の腕を掴むその松本の憎らしい腕に襲いかかるまで僕は一度も止まらなかった。

彼らは突然のことに驚いていた。でもそんなこと僕には関係がなかった。とにかくコイツの手を引きはがしてぶち壊してやりたかった。

クラス中がどよめいた。全員が松本隆とそのグループを囲むようにしているみたいに揃いも揃って僕らを見ていた。

僕は叫んだ。「うああああああ」と言葉にもならない気合いの渦を纏って彼の腕と格闘する。

「つつテメツ！なんだこの野郎！！」

松本は怯む。彼の腕一本と僕の全身が格闘すれば全身で戦っている僕の方が有利だった。彼はあつという間に腕を持って行かれるだけ、当然彼はそれをよしとせず、もう一本の腕を使用してきたのだ。

あつという間に形勢が逆転した。松本は僕より10？以上も体が大きいのだ。腕力に思いのままに翻弄されて僕は投げ飛ばされた。

すると今まで驚いていた他の四人も正気を取り戻したように半笑

いにキレ始めた。

「ぶつ殺す。」その言葉が連呼された。その言葉は彼らが愉しみた証拠だった。

いつもの僕だったらこの段階で相当な痛みを覚悟して抵抗もしなかっただろう。でも今回は違った。いつもだったら鉛のように動かない身体が、足が、四肢の末端に到るまで、僕はこの時怒りに打ち震えていたんだ。

僕はすぐさま状態を起こした。それに松本達は一瞬たじろいだ。いつもと違う僕に少し違和感を覚えたんだ。

それでも結果は変わらなかった。

彼ら是一对一でも勝てそうなこの僕を五人で取り囲んで暴力を応酬した。

彼らの暴力は橋本の一件の分も合わさっていつになく苛烈だった。それでも僕はあまり痛くはなかった。痛みよりも何よりも悔しかった。もつと思いつき切り松本の貌を殴ってやれなかったのが悔しくて痛みよりもその悔しさで僕は涙を流した。

ずいぶん殴られ蹴られた。ズボンを脱がされて尻を箒で叩かれた。全て急所は外されていた。腕の甲や脛や背中、尻や太もも、鈍器から鞭のようなもの、いわゆる致命傷を避けて痛みだけを感じさせるような方法を彼らは使うのだ。まるで拷問のようなものだった。

でもそんなの慣れっこだ。僕は彼らが拷問に飽きてゴミくずのように僕を捨て置き日常に戻ると、ゾンビのように起きあがってズボンをはき直した。

教室の外からは度々”またやってるよ”というような視線が聞こえた。でもやはり、誰も助けには来てくれなかった。

昼休みももうすぐ終わろうとしていた。

身体中が小刻みに痛む。激痛のような痛みからつねったような痛みまで様々だった。だけど一番痛い尻の腫れがほとんどの痛みを押しつけて脳に届けられた。

まっすぐ立つだけで尻が猛烈に悲鳴を上げるので僕は中腰にかが



ソコに立っていたのはタダシだった。あの僕が傷つけてしまった親友。大切だった友達。彼がソコに立っていた。

タダシはドアをくぐりドアは自動的にパタンと閉まった。

静謐に守られたトイレは洞穴のように静かで、物音一つでさえ聞き逃さないように木霊させていた。その中で僕達は向かい合っていた。

タダシの眼差しは相変わらず冷たく無表情だった。

何で彼はここに来たのだろうか？僕は考えた。でもやっぱり止めた。よく考えてみればあれから・・・彼と喧嘩して彼に裏切られてから、僕が此処にこうしてくる度に、彼は此処へ入ってきたのだ。何度も何度も・・・彼は僕を気にかけてくれてたんだ・・・きつと。

何故か絶対にそうだと信じられた。僕はタダシのその冷たいけどその実、柔らかな貌を見ているだけで安心して涙が出てしまう様な気がした・・・。

見覚えのある親友の貌だったんだ。

僕は言った。決めていたその言葉を。ありつたけの気持ちで笑顔を作って。ただ無言でそこに立つ親友に・・・その親友の何か言い出しそうな唇を見つめて。

「タダシ・・・ごめんな・・・。」

そしてすぐに僕はズボンとワイシャツだけ着ると飛び出すようにトイレを出た。

彼の最後の表情を見ることもしなかった。僕はさよならがしたかっただけなんだ。タダシに最後にコレを言わなければ僕はあそこへは行けない。だから、僕は大切な友達へ別れを告げた。・・・告げることが出来た。

\*

親友は許してくれただろうか？それとも許してはくれなかっただろうか・・・でもそんなことはもう関係ない。僕はタダシに謝っ

た。それだけで僕自身本当に救われるように気が楽になったんだから。

これで心おきなく、死ねる。

「へえ、よかったな。これで悔いもなくなったってわけだ。」ハジメが言った。

広い屋上の白い絨毯のような式の上で僕はハジメに今日のことを話した。

ハジメは今日叩かれた尻が痛くて立ったままにいる僕の横で座って、相変わらず牙の様な犬歯を時々ちらつかせながらけつたいに嗤った。

「ところで」ハジメが切り出した。「俺、もうすぐまた転校することになりそうなんだ。」

唐突だった。ハジメは二ヒつと嗤いながらしれつとそんな大事なことを言ったのだから。「・・・え？転校つて、また？」

聞き返さずにはいれなかった。ハジメが何の脈絡もない人なのは従順承知だけど、それはあまりにも唐突であまりにもあつという間の別れの予定だったからだ。

ハジメは座ったまま向かい風を上半身で気持ちよさそうに受けると僕を横目で一瞥した。

「来週、俺は転校する。」

「何で？」まだ彼はこの街に来たばかりだというのに？

「内緒・・・。」

何か子供の隠し事のように戯けた口調でハジメは平然と僕の疑問を打ち消した。

「今度は何所に行くの？」

違う質問を試してみた。何所に行くかなんて考えてみれば僕は彼がどこから来たのかさえ知りはしないんだった。

でもその疑問もすぐにケタケタと戯けた嗤いのもとに「内緒。」にされてしまった。

僕はそれ以上もう質問はしなかった。

たぶん、ハジメには人には言えないような秘密があるんだ。それは最初出会った時から感じていたことだ。それに今更来週のことなんて知ったって何の意味もない。

僕は向き直り空を見上げた。

「じゃあ、僕今から行くね。」

そうだった。僕は今日最初からそのつもりでこの屋上に上がったきたんだ。もう全てに幕を下ろす準備が出来て、僕は決意のような強い気持ちを体中に感じて此処に上がってきたんだ。そして不思議なことに信じられないくらいに体が軽い。何のためらいも今のところ感じない。

するとハジメが横からまた唐突に妙なことを言った。

「まあ、待ちなよ。」ちらりと僕の方に貌を傾けるとハジメは冷めた目つきで片側口を結んだようにして喋った。「確かに俺が転校したらアンタの死に顔しあわせのかおを見てやれないけど、まだそれまで一週間もある。一週間もあれば人間は世界を飛び回れるもんなんだぜ。」

「何が言いたいんだい？」僕は聞き返した。相変わらず彼の言うことは予想が難しいんだ。

ハジメは少し鼻で笑って体ごとくるつと僕の方へ向いた。

「だから、アンタまだやり残したことがあるんだよ。死ぬのはそれを終わらしてからでいいんじゃない？」

「やり残したこと・・・？」

「いったい彼は何を言ってるんだ？僕はやり残した事なんて無い。それどころか今は何の悔いもなくすぐにでも天国へ行けるほどに爽やかなんだ。それとも彼はあのことを言っているんだろうか？」

「イコールの事じゃない。」僕の心を読んだようにハジメは言った。「イコールはもうあきらめた方がいい。正直あと一週間じゃとっついて間に合わない。もとより一生かかったってそれは分かりきらないものさ。」

「じゃあ・・・いつたい・・・。」

ハジメはすぐには答えなかった。僕を見つめたまま立ち上がって、

振り返って背中を向けると、前方のフェンスに軽く手を当てて下界を眺めていた。

僕はそんな彼を黙って後ろで返答を待った。そろそろ十一月になる木枯らしが鳥の大群のようにビュウッと寒々と通り抜けた。そしてしばらくしてハジメは口火を切った。

「復讐さ……。」

「え？」一瞬、彼の口にした言葉を理解するのにためらった。

そして間をおかずに彼は続けた。

「アンタも化けて出たくはないだろう？ 遺書に遺恨を込めた位じゃ人間は成仏出来ないんだぜ。」

「ちよ……ちよつと待ってよ。」僕はとまどいながら彼の背中に近づいた。「復讐って……そんな、だいたいどうやって……？」

ハジメの背中の前まで来ると彼は振り返った。ニヤリと楽しそうな微笑を浮かべている。何かを企んでいるようだった。

それにしても振り返った彼のその貌は身震いを感じるほどに映え渡っていた。白い貌の後ろの真つ黒の髪が無造作にざわめいて、なにか蠢くような恐ろしいものを見ているような寒気を両肩からはうように感じた。僕はその彼のあまりにも悪魔じみた表情にゴクリと息を飲み込んだ。

「いいものを見せてやるよ。」彼は言った。そしてそのまま屋上の出口へ歩き出す。

僕はその悪魔じみた蠢くような恐ろしい雰囲気に催眠術でもかけられるように無言のまま、彼について屋上を後にした。その後ろを見送るのは肌寒い季節の高い空だけだった。

\*

その日も高橋徹は自宅のマンションに帰ると自分に与えられた個室に閉じこもっていた。

かつては勉強机だったパソコン用のデスクに向かい彼は念仏をたれる人の様に歯ぎしりを鳴らしてソレを凝視していた。

咽喉が枯れ果てた砂漠みたいに水分を引かせ。彼はカラカラの喉を潤すためにデスク横のミネラルウォーターのペットボトルに手を伸ばし無造作に一本とるとキャップを投げ捨てて一気に飲み干した。空のボトルは後ろのゴミ箱にキャップ同様投げられた。そしてそのゴミ箱には大量の空のペットボトルが廃棄されていた。

彼が向かうパソコンのスクリーンにはその日も新しいResが書き込まれていた。

”今日、高橋が超いきなりマジギレしてマジウザかった。アイツマジ星になれ。”俺もその時いた。確かにアイツ調子乗りすぎじゃない？”オレ、前からアイツ嫌いだった。”

Resの量はそんなものではなかった。そんな内容ばかりが二桁以上の数で、掲示板を賑わしているのだった。

そんな誰が書いたのかも分からない文章を見つめていると高橋は急にお腹の鳩尾の辺りに捻られるような鋭敏な痛みを感じて貌をかめた。

また胃痛だ、と彼は思った。そして悲痛にゆがむ表情を抑えるようにお腹に手を当て、本棚の上に置いてある胃薬を取ってきてベツトの上に座って新しいミネラルウォーターで飲んだ。

彼はどんよりしていた。まるで生きた心地がしないのだ。食事だつてこの三日間喉をほとんど通らないので体も生気を失い始めているし、何もかも忘れて眠ろうとしても目が冴えてしまつてどうにも寝付けなかった。そのため彼の目の下にはレッサーパンダの様な隈がドロリと垂れている。それぐらいに彼は精神的にも肉体的にも衰弱しているのだ。

彼がこんなに辛い思いをするのもやはり原因はその掲示板にあった。

その掲示板は金城学園の一年二組専用の掲示板だった。クラス委員が率先して建てたその掲示板は夏休み明けからの新しい試みで高

橋は掲示板開設当初からよく参加していた。

しかし、三日前。高橋はいつも通り掲示板を開くとその文章を目にしたのだった。

”高橋殺したい。”ただソレだけの少ない一文だったが高橋は尋常じゃないほどの殺気をその一文から感じた。それはもう背筋がなめられるようにぞつととして何かに見つめられる視線を感じるほどに陰湿な恐ろしい感覚だった。

それから三日、掲示板はその一言をキツカケに見る見るうちに反高橋派を増殖させていた。

高橋には心当たりが山ほどあった。元々高橋は松本の力を盾にして割と横暴な事をやって来ていた。そして”金魚の糞”などと言ったソレに関係する誹謗Resも少なくはなかった。そしてそのせいで山ほどある心当たりは犯人たちの限定をうやむやにしていまい逆に彼に攻撃相手を教えない一種の拷問のような状態になっていたのだ。彼は自分を攻撃する相手の正体が分から無ければ逆恨みも反撃もできないのだった。そして高橋はこの三日間増殖していく誹謗Resとは裏腹に縮小して追いつめられていた。

この日も終に味方だと思っていた仲間のグループともストレスでヒステリーを起こして仲違いしてしまった。

もう味方は居ない気がする、と彼は思った。

胃薬はすぐには効かなかった。だから彼は効くまでベットに横になつて布団の中で蹲るようにして傷みの収まるのを待たなければいけなかった。その痛みが治まらないと到底眠れる気がしないのだった。

胃痛が抓るようなチクチクした痛みが変わると彼は明日のことを考えた。明日学校にまた行くことを……。するとモヤモヤしたどす黒いものが喉元をつまらせるような悪寒がした。考えれば考えるほど悪寒は募り、考えなくても考えないように必死で布団に蹲つても頭の中は白くはなってくれなかった。

彼はもう気が狂ってしまいそうなくらい追いつめられていた。

”人が死ぬ”

その日、僕はいつもとはまた違った気の乗らない気持ちで学校に行った。雲がどんよりと鉛色で低く、肌寒い湿った風が町中を鬱病にしているように暗い日だった。

その日の朝休みは松本達に傷つけられることはなかった。どうやら彼らはそれぞれいつもと違いバラバラに行動していた。野田と池田はクラスの子と盛り上がり、吉田は他のクラスへ遊びに、松本は一人で机の上で肘を突いてつまらなそうに漫画を読んでいた。そして、高橋は……。

「高橋君……。」僕は独り第二音楽室の前の誰も通らない廊下に立ちつくす彼に遠目から声をかけた。

ビクッと小動物のように振り返った彼の顔は死体の様に色あせていた。唇も頬も血色を失い、なのに目は血走りその下には大きな隈が出来ていた。

でも僕は驚きはしなかった。何故なら彼のその顔はこの三日間で段々と悪化していったものだったのだから。しいて言えばその貌色の悪さはまさに顔面蒼白という程でほんの二十分前に見たときよりも容態が悪化しているように見えた。ソレも無理もない。

今朝学校に来て僕は一つの異変に気付いた。もちろんそれは松本達のグループがバラバラに散らばっていることだった。昨日の高橋のせいで少しギクシャクしているだけなら安心できるけどと思いつつも僕はその時、確かめる程度に高橋の机を見た。そしてソコに書いてある文字でハジメが何を企んだのかが分かった。

机の上には短く一言「ウザイ、おまえマジ死ぬ」と書いてあった。汚く書き殴られた字だが、どこかハジメが書いたと思わせるような独特の鋭角な文字質だった。

僕にとってその言葉はビクともしないほど慣れていたけど、その

文字が書かれてあつたのは僕の机ではなく、高橋徹の机だつたのだ。そんなことをされるのに免疫のない彼が、しかもハジメが昨日僕に話したことが本当なら……これは巧妙だつた。そう、巧妙な殺人となるだろう。

”復讐”ハジメはあの時僕にそう言つた。昨日僕とハジメは僕の家のパソコンで一つの掲示板を見た。ハジメはこう言つた。

「俺はただ二個か三個、アイツの悪口を書き込んだだけさ。」

しかし、掲示板に書き込まれた三日間の誹謗中傷の数は二個か三個なんてものではなかつた。ハジメが言うにはソレは高橋の人徳のなせる業だといふのだつた。

焚きつけただけ、それだけで掲示板はまるで見えない凶器の様に人を追いつめる。その時ハジメは嗤いながら僕に計画を話した。

その計画は僕がイジメについて彼に話した日から始められていたそうだ。彼は言つた。「パラノイアつて知つてるか？被害妄想で人間が陥る精神疾患さ。高橋はパラノイアつて程でもないけど、それと同じで今、誇大妄想の渦の中にいるのさ。周囲のみんなが敵になつていき自分だけ孤立している……そう思いこんでいるんだ。ヤツは正常な判断を失つてきている。姿も見せない敵対者をどうにかして確定したいと思つている。高橋は仲間のグループを信用してない。ヤツラの決定的な欠点は信賴關係が薄すぎることだ。

いいか、カズ？明日学校に行つたら高橋は孤立している。そこでアンタは一言こう言えばいい……」

そう、間違いなく、正常な判断を失い、尚かつ敵対者の正体を知ることのみにより打開の糸口を見つけることの出来る彼にそんなことを言つたら……敵が誰なのか彼の頭の中では決定するだろう。そんなことを言つたら……。

僕は顔面蒼白の高橋を前に自分の足が震えているのに気付いた。

僕は思つた。本当に彼らは死ぬほどのことをしたのだろうか？でも次にハジメの言つた言葉を思い出した。「アンタは死ぬほどのことをされたんだろ？」そうだつた……僕は彼らに……。

そしてその時高橋が言った言葉に僕は迷いの糸を断ち切られてしまった。

「なんだ・・・おまえまだ生きてたのか？」振り返ったばかりの高橋のやつれた貌は精一杯僕を見下してそう言いはなった。

でもその声は干からびた何かの様に力がこもってなかった。それでも僕はその時彼を、この期に及んでまだ僕を嘲るその敵対者を許すことは出来なかった。僕の脳裏に甦るのはマザマザとした彼らに辱められる日々だったのだ。そしてあの日、夏休み明けに僕の髪を後ろから切った時の彼の嗤いを、僕は忘れては居なかった。

一つ言い訳を言わしてもらえれば、コレは他人の苦痛を喜びにして嗤いすぎた彼らへの天罰なのだ。僕は悪くない。何故なら天罰を下すのは何時だって・・・運命だからだ。

僕は彼におもむろに近づいた。自分の心臓が高鳴るのを肩から上でハッキリと感じた。

高橋は死人のように色あせた貌でジトつと僕を眺めている。どうやら彼にとって僕はただ一人クラス内で敵じゃないとされている様だった。僕はそんな彼の表情に内心嘲笑して終に口を開いた。

「高橋君」僕はもう一度彼の名を呼びその呪文を言葉にした。「僕見たよ。昨日、キミの机の上に松本君が何か書いているのを・・・」

嘘じゃない・・・彼が彼の机に落書きをしていたのは本当のことなのだから・・・。

一時間目が終わり二時間目が過ぎ去り、三時間目が始まる頃に降り出した雨は四時間目になったら轟音を奏でる盛大な雑踏に成長していた。・・・午前中最後の授業だった。神経質そうな縁のない眼鏡をかけた教師が黒板に数式を書き能書きを言いそして生徒達はそれを素っ気なくノートへ写すだけのそんな授業だった。

僕はそんないつも通り平面に授業をこなすクラスの中、遠い窓の外を雨音を微かに聞き取って漠とした時間の経過に一頻り俯していた。

松本達は普段と変わらないと言ったようにつまらない授業にそれぞれの対応をしている。が、高橋はあの後から姿を消した。

本当に・・・彼はハジメの言うような行動を取るのだろうか？だって松本と高橋はかりにも中学校の頃からの仲良しなのだ。もしも僕が高橋の立場に置かれたとしてもタダシにそんなことが出来るなんて気がしない。でもハジメは昨日僕にこう言った。「ヤツラはお互いの利用価値で繋がってるだけさ。アンタとタダシとは違う。お互いに対しての関心なんてどれだけ持っているか。考えるまでもない。その証拠に高橋はこの件を仲間の誰にも、松本にさえ相談してないんだぜ？」

人が死ぬ・・・。

僕はハジメが最後に言ったその言葉を何回も思い出していた。コレを実行すればどうなるのか？ソレを訊いたときハジメは静かに啞つて必ず人が一人死ぬと言った。僕は今になって自分がなんて恐ろしいことを言ったのか、と両の手が震えているのが信じられないくらいに現実味がないように感じた。

ハジメは言っていた。この復讐は四つ。殺されるものへの死という名の罰。殺すものへの殺人という名の罪と罰。クラス全体に血の染みを残す罪と罰。そして教師達周りの大人達への責任の罪と罰。

僕は考えれば考えるほど自分の喉が干からびていくのを感じた。咽頭の奥の穴がくっついて塞がってしまっているような息苦しさを感じた。もう冬にさしかかろうとしている季節で教室では暖房はまだつけていないというのに、僕の額からは這い蹲るミミズのようなものが垂れた。

そして気付くと授業は終わっていた。聞き慣れたチャイムが僕にその事実を教えてくれたのだ。ソレまで僕は悪夢でも見るように思考に魘されていたのだ。

教師が挨拶をして出て行く。クラスは沸き立つ、それぞれに満面の笑みを浮かべて、どうやら待ちに待った時間帯だった。そう四時間が終わって次は学校生活最大の救いである、昼休みだった。

僕は周りが平然と弁当を開けて食事を始めているのが信じられなかった。知らぬが仏とはこのことだ。正直僕は今そんな気になれない。カップラーメンなどを食べるもの達がドアを開けてお湯を入りに教室を出て行く。と、その時開け放たれたドアから又つと終に彼は現れた。

今まで何処に行っていたのか。彼は漂白剤で白く洗ったような貌をしてゆらりとしたアンバランスな亡霊を彷彿させる足取りをしていた。そしてその目線はまるで居ないものを見ているように真っ直ぐ宙を見つめていた。そしてその右手には、僕だけが気付いたのだらう、彼の護身用のコンバットナイフがその湾曲した刃を嘘の様にちらつかせていた。

どうやら彼はやる気なのだった。

「あ、トオルじゃん？」誰かが言った。クラス全体がその言葉に彼を振り返ったように感じた。

僕は松本の方を見た。松本は呆れたような貌をしてそのやつれた友人の方へ歩いていこうとした。僕は喉元をつんざく様な言葉を必死で堪えた。そしてからからの喉にゴツクンと潤いを与えた。

息が上がってきていた。首元から脈動する音がうるさいくらいに大きく聞こえた。松本は近づく。彼も近づく。僕は立ち上がっていた。

「近寄っちゃダメだ！！」自分の口から出たとはすぐには信じられないような、そんな叫びのような大きな声だった。クラス全体が僕に視線を向けた。松本は徐に僕にガンを飛ばした。

そう僕はその時一つ魔されるような思考に答えを出した。人が・・・そんなことで死んでいい訳がない。ただソレだけだったけど僕はその時動いた。

「何だ、てめえ？」松本がそう言った瞬間その横からは高橋が駆け寄っていた。

グサツ。フォークでソーセージを刺すようにつんぎった感覚がスムーズに僕の中に流れ込んでいた。

クラス全体が一斉に叫びのようなどよめきを上げた。

僕は自分のお腹に差し込まれたものを確かめるためなのか？傷口が本当にあるのか確かめるためなのか？ゆっくりとその手で刃と湿った制服を触った。

又メットした布と刺さったままのソレの難く滑らかな感触の違いがマザマザと指に伝わった。

高橋は声にもならない叫びを上げて後ずさっていった。まるでこの世のものとは思えないような恐ろしいものを見るような目で僕を見つめたままソコに尻餅をついた。

後ろで松本の声が聞こえた・・・何か言っていた。でもよく聞き取れなかった。

知らなかった。いつの間にか僕も座り込むように床にへたっていた。

クラスがどよめいていた。でも全てが夢のようにぼやけていたせいで、何で騒いでいるのかよく分からなかった。

ただ分かったことは僕は、人殺しにならなくてすんだ・・・僕は松本を守って刺されたんだ・・・よかった。

最後の映像にとても嬉しい者達が写った。尻餅をつく高橋を取り押さえるクラスメート達。座り込む僕の肩を抱き上げる親友、その横で僕なんかのために涙を流してくれる好きな女の子。何人もの声が僕の名を読んで、そのどれもが僕を嘲ってなんて無かった。とても愛されているように感じた。

みんなが僕の味方だった・・・。

暖かかった。此処がこんなに素晴らしい場所だとは知らなかった。僕は此処が好きだ。この教室もこの友人達も、僕は好きだ。みんな大好きだ。

急激に暖められるような居心地の良い温もりを感じた。

僕はなんて幸せなんだろう？なあ？タダシ・・・。

目の前で何か必死に呼びかける親友に僕は心から笑いかけて今の心境を伝えた。残念だけどその時僕は言葉がうまく出せなかったの

だ。

ハジメ・・・ごめんよ・・・約束は守れそうにない・・・でももしキミが此処にいるなら見ていてくれよ・・・コレが僕の死貌さ・・・。

最後に誰かが叫んだのが聞こえて・・・僕は瞼を深く閉ざした。

a v e n 〓 d e a t h

b i r t h 〓 H e

白い日だった。晴れ渡った青空がそこからはよく見えた。ベージュのカーテンが無風の陽気を表すようにしなやかに纏まっている。ポカポカと暖かそうな日差しが窓枠を包み込み小さな木漏れ日を造っていた。

僕は先ほど通学途中に立ち寄ってくれた数人のクラスメートの置いていった花と果物を確かめ、また少し空に向き直った。

雲一つ無い青空の下は閑散とした冬の午前が広がっていた。大学の病院の二階は病院の外から来る人々のせわしい暮らしの音などかすれるくらいにしか届かない、それに今は午前中だった。

そこから見える空は、いや地上さえもまるで違う世界のように感じた。僕とその間に奇妙な距離を感じた。でもそんな風景も悪くない。学校の教室で授業中に見る窓の外とそう違わないから、ついこの間の事なのにとても懐かしく思えて心地がいくらいだった。

ふとすると扉が開いた音がして僕は振り返った。

ソコには嘘みたいハジメが立っていた。

「よお、元気かい？」ハジメはニヒっとお見舞いっぽく陽気に笑った。そのままに平然と僕の横まで来て丸椅子を寄せて座った。

「どう、調子は？」

窓際の花束と果物のバスケットを見ながら彼は言った。

「それだけ？」聞き返す。

「いや、昨日アンタが目を覚ましたって訊いてさ。」僕の表情に

目も当てないでハジメはそう言つて手を伸ばしバスケットからミカンを取り出した。皮がむきやすいので良いという計らいの果物だった。

「怒つてないの・・・？」

「なんで？」ミカンの皮をむきながら彼はうつむき加減に目を伏せた美しい表情で聞き返した。斜め下からの美しい輪郭のラインが流麗だった。

「クラスの子たち、今朝来たんだろ？どんな感じだった？」僕がそのなんで？に答えないうちに彼はそう言つてヒョイッとミカンを半分割つて僕に投げてよこした。

僕はソレをあわてて両手で受け取つた。そしてその半分のミカンの白いヒダヒダを少し眺めてみた。

「うん、何か僕勘違いしてたみたいなんだ・・・ずっと。」ポツリとそう呟いてみるとハジメは「それで？」と流し目で促した。

「みんながみんな、僕をイジメてたわけじゃなかった・・・今回の事で僕はソレが分かつたんだ。」

「そっか・・・。」ハジメはそう相づちをうつて静かにミカンを一つ一つちぎつて食べた。

僕はそんなハジメの横顔に少し思いをわき上がらされた。

「僕、思つたんだ。イコールについて。」

ハジメは食べかけのミカンを引き出しの上に皮をお皿になるようにして置いて、僕と向き合つた。続けてくれ、と言つるように目線をハッキリと僕を見つめる。そんな彼に答えるように僕は喋つた。

「たぶん、死んでも人は天国に行けない。僕は思うんだ、天国ってイコールと同じじゃないかな？ゼロと天国が同じならイコールもそれと同じさ。過去がマイナスで未来がプラスならその間にあるのはゼロだろ？式と答えが過去と未来ならその間にあるのはイコールなんじゃない？死は必ずしもゼロじゃないんだ。答えはイコールとは同じようで違うように、天国は死んだって味わえる感覚じゃないんじゃないかな・・・。」

ハジメは無言で僕を見つめた。ただ彼の瞳は段々と大きくなって幾度かしばたいた。

「ぼくは・・・」彼を見つめ返したまま言った。「死にたくない・・・。ソコに天国があるとは思えないから。」

ハジメはしばらく僕に大きな瞳を当てたままジツとしていた。そして次に爽快に笑った。

「カズ、アンタやっぱり最高だ。そうか・・・どおりでイコールは不可知すぎると思った。そうかそういうことか・・・ゼロはイコールだったのか・・・そりゃあ、終わらないよな・・・。まるでお互いの尻を食い合っているみたいなものだもんな。」

「ありがとな・・・カズ・・・」そう付け足してハジメは徐に立ち上がった。そして僕を見下ろして優しく微笑むと「俺、今日これから発つことになってるんだ」と言った。

僕は一瞬何が何だか分からなかったけど、ふと彼が引越すことを思い出した。

「そうか、もう今日?」

聞き返す僕にハジメは小さく頷いて返事をした。

僕は彼に別れの挨拶を、と考えて・・・しばらくすると「じゃあな、もう会うこともないだろう。」と立ち去ろうとする彼を呼び止めた。

「違うよ。」

彼は振り返った。珍しくキョトンと無知な少年のような貌をしていた。

「違うよ。僕達はこの現在の<sup>ウツクシ</sup>のしたにいるかぎり永遠に繋がっているんだから。僕は君にお別れを言わない。だってそうでしょ?何時だって一緒なんだから・・・。」

彼は笑った。僕も笑った。

「そうだな」彼は言っ僕はソレに促されて窓の外の青い一面を指さした。

「見てごらん、此処はまるで天国だ。」

彼は点、僕は和。点は始まりで和は終わり。その間には何時だった空というイコールが広がっているもの。その空が僕らを繋いでいるもの。ゼロは何時だって人と人の間の空間にあるもの。それだけでいいもの。

### 零空之転向生

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6123i/>

---

ゼロからの転校生

2010年11月14日09時40分発行